

孟津抄「若菜上」翻刻 (二)

野村精一・平井仁子

凡例

一、前号に引続き、本学黒川文庫蔵「孟津抄」若菜上巻の後半部（九五丁以降）を翻字すると共に、解説を付する。

又いぶせき思ひをもするとの心也

にはかにおくおほえぬ あかしの上の源よりむかへ

給て京へのほりし時われものほりし事をいへ

りかひある御事をみ奉るとは姫君の春宮

へまいり給ことをいへり

かたつかたには

弄 明石入道を思の心也尼の詞也 そむきにし

京へのほりてよろこひにはあひ給へともかた心

には入道のことのみおほつかなくかなしきことの

うちそふと也

人にすくれん 明石上の心也たとひ人に

すくれたる榮花にはこるともかやうにいける

(95才)

世に父にわかれなどしては榮花もなにせん

数ならぬ身には ひめ君をもわか物なからわか

物ともえし侍らぬと也 明石上の卑下の心也

わか身はきはくとかひあるへき身にてもなけ

れば父などにもいつあはんともしらすそ

のまゝやみなんは口惜と也

よろつのことさるへき人の御ためとこそおほえ侍れ

花 さるへき人とは親の事をいふ也

昨日もおとゝの君の あかしの上のさふらひし

を源の御らんせし也

弄 中宮に付奉りて明石上のあ給ひし事

かくそひ給御ためのいとおしきになん

(95ウ)

明石上の身一くるしからぬことなれとも姫
君の御ため我かる／＼しければいとをしき
の心にいへり

花
尼上のあかしの上にそひ給ふことも

あかつきに 南のたいへまいり給ふ也

わか宮 尼君の詞

いまみ奉り 明石上なくさためてのことば也

女御の君もいと哀になん 姫君也 明石ひめ君

も尼君の事をあはれにおほしめし出給ふと也

院もことのつめてにもし世中おもふやうならば

源も尼君の事をおほせいたさせ給と也

ある本に院もことのつめてに此詞なき本

ある也

ゆゑしきかねことなれとあま君そのほとまて

なからへたまはなん 若宮春宮に立給はん

を尼君のなからへてみ給へかしとの給也

かやうに申せは尼君のなからへてもはやくなく

なり給へきやうなれはいま／＼しき兼言と

いふ也又院もことのつめてにとある本の

時はこのことば、源のおほせらるる事也その

詞なき本なればひめ君のゝたまふことを明石

上の尼公にかたり給ふ成へし

又うち多みて あま君也

さま／＼ためしなき

(96オ)

弄

愁の中のよろこひ也 心は入道にあはぬ事
の歎と又此やうにひめ君の御子をまうけ給
て行末たのもしきうれしさにあふとはさま／＼

ためしなき事也

このふばこの 入道の方よりの文箱也

めつらしきことさへそひて ひめ君の御はらに

春宮の御子いてき給ことをむらさきの上

ののたまふ也

弄

春宮の御心をいふ

宮す所は 女御よりくたりたる歎又不然

義もある歎問云皇子いてきさせ給ひて

後はみやす所と号する事にや答東宮の

御時后かねをは御息所と申也古今集第一

巻二条后を東宮の御息所と申に同也

御子のありなしにはよらす 明石姫君也

こゝにてはしめてみやす所とかけり后かね

なる人をいふ也此物語には太略皇子誕生

已後を御息所とはいへり

かくためらひかたくおはする程つくろひてこ

そはなと 産後御養生なるへし

たいのうへなどの 紫上などの我御方にわ

たり給て人すくなゝる時なり

おまへに ひめきみのおまへなり

おもふさまにかなひはてさせ給ふまでは

(97オ)

(97ウ)

(98オ)

あかしのうへの詞也国母などになり給てのこと、おもへともとなり

はかなく成侍なは

弄^{リシツ}た、人のことく臨終なとに御らんせられしと也

かはかりと見奉り 姫君も成人ありつれば

我身世をそむくとも心やすしと也

身にはこよなく 明石上のわか身よりはまさ

弄りて紫上千秋万歳とおもふ也

我にまさりていのると也 心は人ことにわか

身をこそいのる物なれば紫上の万かたしけ

なき姫君の御あつかひをみてはあかしのうへ

のわか身よりむらさきの上の御世なが、れとい

のり給との心也

もとより御身にそひきこえさせんにつけても

心はもとよりとは始よりの心也姫君に明石上

のそひ奉らんはつ、ましきとは卑下にいへり

それにより紫上の養子になし申しに是は

とまで懇にし給はんとはゆめ／＼しらさり

した、大かたのこと、思ひし也

涙くみてき、おはす ひめ君のさま也

かくむつまじかるへき 明石上の礼ふかきさま也

明石上の御子なれとも姫宮は隔心し給ひて

物つ、みし給と也

(98ウ)

あつこへたる みちのくにかみのあつきこと也いとあはれみ 姫君也

院は姫君の御かたに 源は女三の宮の御かたに

おはしまし中のさうしあけて姫宮のかたへ

わたり給也

ふとわたり給へればえしも引かくさて御木丁

を引よせてみつからはたかくれ給へり 明石上也

わか宮は 源の詞也わか宮前におほとの

こもりたるかをどろき給へりやとの給へり

御かたたいにわたしきこえ給へると聞え給

花^イ紫上の東^イ対^イへわかみやをわたし聞え給へるよし

弄御かた明石上也 明石上木丁すこしひき

よせてありなから此御返事を申せり

いとあやしやあなたに此宮をらうし奉て

紫上の御かたに若宮領し奉給との詞也

しむる心也

人やりならず 心からといふ詞也

こなたにわたりてこそ 紫上のこなたへ参て

こそ若宮をみ奉らんに宮にてまします

にとの心也

いとうたて思ひくまなき 心にもおほしめさ

ぬ事なの給そとの心也女宮なとこそあれ

男御子はおくふかくなきもくるしからぬをたは

ふれにもさやうにの給は、むらさきの上の心をへ

(100オ)

(99ウ)

(100ウ)

たて給やうにおはしめすへければかしこから
せてさやうのことなの給そと也

弄 おもひくまなき事かな

人の懇なるを思はぬ心へたて、源をへた
つとの給也

花 女におはし皆さんにたに

ひめみやにておはしますともあなたへわ
たし奉らせ給て見奉らせ給はん何事か
は侍らんいはんやおのこ宮にておはしませは
とさまへも御みしろきあるへきことなればあな
たにてみまいらせ給ふこそいよ／＼心やすく
おほえ給へと也

うちわらひて 源也

御中ともにまかせて 源の詞也さらは我は見
はなち申へきとの給也若宮の御こと也

まつはかやうにはひかくれてつれなくいひおとし

給めりかしとて御木丁をひきやり給へれば

花 はひかくれては物へたてたる心也いひおとし

給は人をいひおそれしむる心也源氏の給事
をさかしらなど、きこえ給事をいふ也是は

弄 あかしの上の事也

源詞也明石上にたはふれ給詞也源をいひ
おとし給と也はいかくれてとは源みえ給はて
との給ふをいへり

(101ウ)

ありつるはこ 文箱也

さておはするを そのまゝあかしの上におはし

ます也

なそのはこそ なかうたよみてふんしこめたる

とは長哥也封しこめたる也

なりかへらせ給める 源此比もよひなとし給ふを

下と思ふ成へし云々源いにしへに成かへり給

好色の御心ならひにわれらか聞しらぬ事を

の給と也内侍督君へしのひてわたり給を

下によくしりての給也

物哀なる御けしきともしるければ 明石上も

ひめ君も入道の文を見給おりふしなれ

は物哀なるけしきの有を源の御らんじて

何事にかとふしんし給てかたふき給ふ

やうなれば明石上のわつらはしくて入道より

の願文のことを源へ申さるゝ也

わつらはしくて あやしみ給事のわつらはし

さにありのまゝに申さるゝ也

なにかはあけさせ給はん 明石上詞也

あはれなるへき 源の詞也

弄 こゝらのとし比のつとむるつみもこよなからんかし
あかし入道の事をの給へりこよなからんはすく

れたる義也罪を滅せんとつとむるにつみの
きえんもすくれぬへしと也 明石入道とし

(102オ)

(102ウ)

比をつむによりて罪障の消滅もことの

ほかなるへしとや云々連々勤行の功をつみ

すみ給ふらん命ながくおほくの年をつとめて

給へはつみを滅するくどくもこと／＼しからんとの

心也罪こよなからんとあればつみのおほき

やうにきこゆれとさにはあらす罪を滅せむ

とつとむるくどくかこと／＼しからんといふ

心なるへしこよなきとは勝たる心もあり

さかしきかた／＼の人 貴僧高僧とてあま

たみ侍しうちにも名利にのみそみて真

実の道者はあかし入道ほとの人にはなかりし

と也

かやすき身ならば 源の御身かる／＼しき

事ならば入道に忍ひてあはまほしきと也

心は明石上をたすけての給心也されは明石

上も満足し給也

今はかの侍し所をもすて、鳥の音きこえぬ

明石上の詞

古へとふ鳥のこゑも聞えぬ奥山のふかき心を人はしらなん

言なるよとの心也

あま君いかに 源のねんごろなる性をかけり

此夢かたり 明石上の入道よりの文を此つゝ

てに源へみせ申さるゝ也

(103 才)

花いとあやしきほんしとかいふやうなる跡に

梵字は天竺の文字也十二の摩多卅五の

對文なといふ事あり筆跡のわるきをは

梵字のやうなるといへり

今はとて別 入道に別たれともなをこの文か

なこりそとのあかしの上の詞也

とり給て 源入道の文をとり給也ある本に

なをほれ／＼しからす 年老たりとも見

えずと手跡なとをほめ給也

この世ふるかたの 末世をいとなむ也

入道は立身のかた又世上の方はやふりて末世

のことをいとなむ人と也

かのせんそのおとよはいとかしこくありかたき

心さしをつくしておほやけにつかうまつり給

けるほとに物のたかひめありてそのむくひにかく

す多はなきなり 入道の先祖に清慎公を

比してかけり民部卿忠文といひし人むかし

東武をたいらくる大將軍なりしか子細あり

て清慎公の悪靈と成て子孫をたちし

河事に入道の先祖を比してかける也

忠文民部卿將門征伐の大將軍たりけるに

勸賞の定ありける時清慎公うたかはしき

をはおこなはされと申されたりけるを弟の

(103 ウ)

(104 ウ)

(105 才)

右丞相刑の疑はしきをはおこなはされ賞の
うたかはしきをはおこなへところあれと申
されけれどもつるに御さたなかりけり翌
朝に民部卿右丞相に参り畏り申て冨家の
券契を奉り家に帰て手をにぎりて立た
りけるか十の指の爪手の甲まで生出て血は
紅をしぼりたるやうにて思死にしけりやがて
悪霊となりける其ゆへにや清慎公の子孫
は末なく成て小野宮も他家へ傳けると云々
もし此事歎見旧記

花
明石入道は大臣の御末也村上院の第一の
御子廣平親王は民部卿元方卿のむすめの
更衣腹そかしそれに御弟冷泉院は后腹
にておはしまし、により第一のみことをさし
をきて東宮に立給へり民部卿是をはいなき
事に思ひて死にせしか其後冷泉院御物
くるはしうならせ給ひて御子花山院三条院
とおはしまし、も花山院は俄に御位を
すて、御ぐしおろさせ給ひ三条院は御目み
えさせ給はすなとせしか又三条院の御子に
敦明太子と申侍しは御位の御望なきよし
仰ありてにはかに院号かうふらせ給ひて
小一条院と申きかやうに冷泉院の御末
いつれもすか／＼ともわたらせ給はぬはかの

(105ウ)

(106ウ)

霊のするわざとそみえ侍しさて三条院の御
むすめに禎子内親王と申は後朱雀院

の御代に入内ありて後三条院をまうけさ
せおはしましてのちに陽明門院と申き其
御すゑのみこそいまの世までつたへさせ給
へ三条院の御すゑ男かたはたえさせ給ひて
女の方より御子孫をのこし給へる事此物語
にいへる明石入道の事に公私のちかひめこそ
あれ似よりたるやうなればつめてなから
しるしつけ侍り是は物語つくれるよりはる／＼
後の事なれと世のことはりにしへもいま
もかはらぬ事成へきをや云々

弄
入道のおやの事准拠は清慎公の事をおもへり
将門征伐實事見河海

をんなこのかたにつけたれとかくていとつきなし
といふへきにはあらぬも 女子のかたにとは
只此物かたりのうへにて明石姫君の事を
給なるへし花鳥は女子のかたより相續の
事をひけり是もよろしき歟但此物語の
うへにてみるへしと也つきなし

夢のわたりに

世の中はの哥あたらずたゞ夢の義也わたりは
優なる夢の事を書詞のたより也
あやしくひか／＼しくすゝろにたかき心さし

(107オ)

(107ウ)

ありと 是は源の入道の心をの心へり明石上

然るへき縁にもかすは海にもいれなと、前にいひしを思出給也又たかき心さしとは入道の心にあかしの上を高位につかせたく思ひしを人のとがめたる事をいへり

又我なからもさるましき 源もかりそめに後浦にて明石上にあひそめつるはあるましきこと、思し也然所にひめみやのむまれ給はさてはふかき契もあるやとするなれとまだめにみえぬさきの事はいかにあらんともしらざりに今はかやうに中宮にも立給はん事よと思ひあはせ給と也

この君のむまれ給ひし 弄 あかしの女御の事よこさまに 源左遷し給ひしもさては

明石上ひとりにあはん為にこそありつらめと思あはせ給と也 心のうちにをかみて 偶仰してとり給也

入道のいかやうなる願をたつれば行多かやうにめてたき夢をか見しと心にをかみてとり給ふと也

これは又くして

源の願をもはたし給へき事ありと也 源も御立願あれはくはへてはたし給はんと也

そのつゐてにいまはかくいにしへのことをも

(108 オ)

源姫君へ教訓也ことの由来は入道の文に

き、給へはと也

あなたの御心はへ 弄 紫上の心はへを云

明石上の御子といふことをしり給へと紫上のことををろかに思給なと也其ゆへに三歳の時より紫上にやしなはれ給へはまことのおやと思ひ給ふにた、いましんしちのおやは明石上そとしり給は、紫上をつぎにかし給はんとの御心なるへし

もとよりさるへき 実子夫婦兄弟等を云

おやこのあひだ又えのかれぬ中のとうかなきは勿論也

よこさまの 他人の情をいふ云々よこさま

にあるましき人の情のあるは大かたの事にてはなきそと也是は紫上継母ながら懇なる事を姫君にいひしらせ給源の詞也

こゝになとさふらひなれ給をみるゝ 今明石

上姫君にそひ奉給にもかかはることなくあつかひ給へる紫上の心さしの殊勝なるをいへり

ねんころに 弄 紫上の心をいふ

いにしへのよのたとへにも

まゝ母のたとへ也 継母の事うはへは

よきをもさもあらぬかとたとははかしきやうなれとあしき心なるへしと也たゝうへのけ

(109 オ)

(109 ウ)

(110 オ)

しきあしからずはそれをたのまは引かへし
継母もつみえかましく思へしと也

昔の継母などの事をいへり継母はうへはまゝ

子をはぐゝみたるやうにて下の心はさもあら

ぬをその子よく見しりてそのあつかひ

にしたがふはかしこさうなれとそれはあしき

と也らう／＼しきたよりとはこゝにては其

子かおとなしくよく分別する心なり

あやまりても我ためしたの心ゆかみたらん人を

その子のために継母の下心ゆかみたりとも

それも見しらぬやうにうらなくたのまは継母

も引かへしかやうの子をはとてつみえさすへ

きをもおもひなす事のあるそと也

弄むかしの世のあたならぬ人は

大かた世の人々の中の事をいへりあたならぬ

とは実なる人なり実ある人の中はたがふ

ふしある時もかた／＼とかなきよしをあきら

めなとすればをのつからくるしからすよく

なす事なりと也 実ある人也実ある人は もて

人に恨をのこさゝれば人の中ことをいへとも

それはやがてはるゝ物と也 おほろけならぬ

むかしの世と也

花ひとり／＼つみなき時には

まゝ子も継母もをの／＼とかなきをいふ也

(110ウ)

弄

我も人も罪なき所あらはるればくるしから
すと也をの／＼まつなむるをよしと也

さしもあるましきことにかと／＼しく

さしてもなき事を人の中ことなといへは

それをかと／＼しく心にくせをつけてあいそ

もなく人と中なとたかひたるははたして中

をはなれをれともそのいこんのこるものととくせ

をつくるとは心のふしのことをいへり

花おほくはあらねと人の心の

源のみ給ふ御方／＼の事也 源の見をよひ

給ふ人々をの給へり

弄ゆへよし 故とは本性由は心たて也さま／＼

に用捨ありと也此段二巻の品定の心に

かなへり云々故とは本性也よしは心もちの也

物を分別する心つかひなり此段審木の

巻のしなさだめの心にかよへりこの物かたりの

本意をくり返し／＼心をならふへき事をいへり

えたりかたありて 每人ヒトトモとる所なきはなけ

れともまたとりわきて我ものとたのまん

人はまれなるよし也

このたいを 紫上を大やうにしかるへき人とは

いはん也源の詞也此段は二巻の品定に心かよ

へり 河カハ 泯ヒナ

ひたゝけて

(112オ)

(112ウ)

花^つ

明也須まの巻にもありし詞也 又よし
よてもあまりにもつてひらきたのもしけなき
も不可然と也是は女三宮の御事か源の

下心にの給也

かたへの人は思ひやられぬかし

源の此御詞にてよのかたさまの人にはしら
れたる心也

弄

紫上の外は得失さま／＼なりときこゆ

源の心をすいりやうして明石上なとは

思ひやる也

弄

そこに 明石上の事 いとよしはしかるへき

との事也

むつひかはして 明石上紫上との間の事也

此御うしろみとは姫君のうしろみの事也

花 給はせねといとありかたき御けしき

これはあかしの上の御返答也 源のおほ
せられねともと也

めさましき物に

紫上はめさましくも明石上をおもひ

給はぬと也

あかしの上の詞也我らをむらさきの上のめさ

ましきとのみゆるし給ましけれ共かうまで

御らんししることく数まへ給もまばゆきと

つみなきさまに 悉皆紫上の明石上に

也

(113オ)

は何事もとかのなきやうにもてかくし給にいま、
てもこゝにはあると也

その御ためには あかしの上には御心さし

はあるましき也女御をねん比にし給ふゆへ也

うちそひても 源の詞也明石上の為には懇

にあるましけれどもひめ君の御有様を紫

上のうちそひてもみ給はぬ心のおぼつかな

さに明石上を紫上の代ともおほしめして

春宮にもそへてをき申さるゝそと也

あかしの上にゆつり給ふ也

花 それも又とりもちてけちゑんになとあらぬ

是は紫上の御うしろみし給ふこと也

あかしの上おやかほをし給はゝあしかるへきを左

様にもなければいよ／＼紫上の心然るへきと也

落着明石上の卑下よきとの心也けちゑん

とはあらはなる心也蜚巻にもありし也

はかなきことにて物の心えす 是は惣別の

こと也心えあしくひかみたる人はそと立

なを所なく 紫あかしみな／＼心得よきに

源も心やすきと也河内本にはさてとあり

さりやよくこそ よくそ我卑下したると思ひ

給心也

たいへはたり給ぬ 紫上のかたへ源かへり給

(114ウ)

(114オ)

と也

さもないとやむことなき 源のかへり給ふ御あと
にてあかしの上の心也紫上に源の御心さし
のまさることをおもへりそれもけに／＼こと
はり也人よりも別而然へき心もちの調
たるゆへにかく思ひ給ふそと也

(115オ)

宮の御かたうはへの御かしつき うはへはかりにて

紫上にはおまひおとし給と也 源の面むき
はかしつきたまふやうなれとわたり給事も
とき／＼なれは又かたしけなきこと、也

いま一きは、女三も紫も同王孫なれと女三は

朱雀院の御子なれはいま一きはまさり給ふ
をいふ也みな明石上のしりうことにの給ふ也

しりこちきこえ給に
花^{ハナ}後言^{ゴゴト}也源の御うしろこと也

我すくせは 明石上の御宿世を思也

山すみを 入道の事のみ思ひやるかおほつかな
きと也

ふくらのそのに種まきてとやうなりし
河^{カハ}説^{セツ}也

耶輸^{ヤシュ}託羅^{タクラ}かふくちの園に種まきてあはん必有為の都^ツ
奥入^{オウイ}云雖^レ有^ニ此^{コノ}説^{セツ}此^{コノ}哥^カ證^{セイ}掇^{ダウ}不知^レ誰^{ナニ}説^{セツ} 頗^{ナラニ}凡^{ボウ}

俗事^{ソコト}欤^カ云^ク

弄^{ロウ} 耶輸^{ヤシュ}多羅^{タラ}の哥奥入に此哥を不用云々哥^カ
躰^{シノヘ}凡^{ボウ}俗也と云々伊勢物語塩尻^{シホシ}の注俊成卿^{シノケンセイ}

(116オ)

不用云々凡俗なるによて也たゝしらすといひ

てありなんと云々殊勝^{シュショウ}事也たゝ福分^{フクブン}の

種ありと心得であるへしと云々 尼公の

心也此詞いやしきやうなれはたゝとかくに

あつかはす行末たのもしき心とはかりみる

へし

後の世を思ひやりつゝ 現世はさるへければ来世

をもたのむよし也

大将の君はこの姫君 夕霧に女宮をはしめつ

かたは朱雀院よりたひ給はんなどゝ御心ばへ

有しにより聊心をかけ申さるゝ也

大かたの御かつしきにつけて 源の心にも入

給はぬに付て夕霧なともしか／＼とは

あらねとおりの参りにくきによりかくいへり

かたち人 みめよき人也 貞人^{マコト}

物思ひなける御あたりとはいひなから何事も

のとかに

弄^{ロウ} わかやかに心しつかならぬ人の中に又のとか

なる人もあるへしされと人々のわかき心ち

なけなるにましりて順してあるへし又云

心は明白也又心のまゝにしつかならぬわらはな

とはましてめにつかず御覧するよし也云々

はなやかなる人たちはかりなる中にも又のと

(116ウ)

(117オ)

かなる心もちたる人もあるへし又下に

おもひのある人もまじる也されとのとかに
うちしつまりたる人々も此はなやかなる所

にひかれてそのかたにみななる也人の
心はともたち又すむたちによりてうつる物
也かやうの所心を付へし

身に人しれぬ思ひそひたらんも又まことに

心ちゆきけに
花

物思ひある人も心ちよけなる人にうちまし

れはそれにひかれつ、おなしやうにみゆると也
云々

さやうに人々あまたある中にも下の心に

物を思人のあるも又まことに心ちゆきて

何事も心にと、こほらすある人にましりて

ゐれはをのつから其人にひかれて思ひなき人
とおなしやうなる物そと也機嫌よき人にまし

はれはわろき人も同心になるものそと也

ひとつさまに 源の物をひろくみ給ふ御心

なれはみゆるし給と也

けにこそありかたき世なりけれ 夕きり

の世中にしかるへき様躰はなき物そとの

心也それにつきても紫上の事をいよ／＼

きどくと思ふ心也

紫の御ようい 世にもりいてさると也

見し面影も 野分のまきれに紫上を見給
し事

(117ウ)

わか北のかたも 雲井鷹也 哀に思ひ給ふ
かたはふかけれとも上臈しくなとはなき人
なりと也

をたしき 雲井鷹を得ては又こと心もなき
をいま源の女三宮を得給へるを見て心も
聊みたる、と也

この宮は人の御ほとを思にも 女三宮は御

くらゐの事はせひにをよはすされともと

りわきて源の御気色もなく人めばかり

にあつかひ給とみえたと也

みたてまつりしる 人めはかりにし給へる

をしかるへからすと也

この宮を 女三宮を朱雀院かしつき給ひ

ていかやうにもとおほしめすおりふし衛

門督君申入しに院もめさましくはおほ

しめさゝりしと聞しと也

女房のたよりに 女三宮に小侍従とてあり

女三宮の御めのとのむすめ也柏木のめのと

のために小侍従はめい也柏木のめのと

女三宮のめとの姉也

かたしけなくとも 心も有ましき物をと也

柏木数ならぬ身なれとも源のやうにさる

物思ひはさせまいらせしと也

けにたくひなき 朱雀院の我をきらひ

(118オ)

(119オ)

(119ウ)

(118ウ)

給ひて源へいれ申さるれと紫上にをされ

給へは柏木の思ひしこと、也柏木には相当

せずとも只今のやうに物はおほしめさし

小侍従といふ 女三宮の乳母トト柏木の乳母のめい也

私云

師説小侍従の母三宮の御乳母といへり

いかゞ

おとゞの君もとよりほいありておほしをきたる

かたに

源の御山こもりの事也

源の紫上に心をつけはて給はくと也

源も世中さためなきとて御隠遁あら

は其時は柏木の心やすからんと思ありくと也

ほいありてとは源の世をかれんとの本

意のこと也

大やけわたくしにことなしや 禁中などにも

御遊はなきかと源の尋申さるゝ也

こゆみいさせて 問云小弓のやういか、一勘

雀小弓の事なり別なる義なし

みたりかはしき事の 鞠をいへり

しん殿のひかしおもて

桐壺はこなたにわたり給へは今は御るすの

折ふし也まりのかゝりは南庭にあるよしみえ

寝殿の南むきとすゑにみゆ南の東より

にや 此程は桐壺まし／＼たるかた

(120オ)

よしあるかゝり 木陰なるへしよしある所といふ也

花鳥に西對の東おもて鞠のかゝりと云々いかゞ

まりのかゝりをうふる事は保元ホゲンに内にて

きりたてであり是はじめとみえたり又西の

對といへるおほつかなし只しん殿の東とは晩

景には西へよりて蹴鞠ありとみえたり階

の東なるへし

おほきおほいと、君たち 頭弁兵衛佐大

夫の君いづれも太政大臣の息兄弟三人也

弁の君も 弁官は儀式官なれば也かやう

のあそひなとをはおもてにはさたせさる官な

るへし

上達部ウツタツベ 衛府司なれば也自然源をはかりて

斟酌サツサツもありやとてかくの給也

かはかりのよはひ 源の詞上古には老後には蹴

鞠は斟酌ある也成通ナリトウも五十未滿ヒトツミまで蹴也

頼輔タナヘ六十七のとし上鞠ウヘマキせしは一段の事也

さるはいときやう／＼なりや

花 輕々也鞠の事もみたりかはしきあそひを云也

一勘花鳥に亂すと云々鞠の遊の跡みたり

かはしきさまなる事也しつやかならぬ事

にやさるはとは前のことはにまりに心のひく

やうにいひしに對す つねにいへるきやう／＼

といふは一篇にことさたまらざるをいへりこゝは

(121ウ)

(121オ)

(122オ)

みたりかはしき心にいへりいづれもおなし心
にやこのことのさまよといふもしつかならぬとの
心なるへし

もえぎのかけ 花はちりたるあと也

木のめのあを／＼としたるをいへり

はかなき事なれと 鞠のことをいへり

みはしのまにあたるさくらの陰に

花 寝殿の南むきに階間なるへし 次第ににしに

おとゝも宮もすみのかうらんにいてゝ御覽す

花 鞠をうへよりは見おろさぬ事に人々心え

たれと人によりてかゝることもありし也

すみのかうらんは東の對の西のすみのかうらん

なるへし すみのかうらんとは東也

かふりのひたいすこしくつろぎたり

弄 たゝまりにくつろきたる心成へし

やうだいをつくるふ上らうも鞠にみたれて

冠のくつろくにや又あせなとにてくつ

ろく欵

大将の君も 夕きりもくらゐよりは鞠に

行跡をみたりたる也

さくらのなをしの 表 白 裏 蘇芳

さしぬきのすそつかたすこしふくみてけし

花 きはかりひきあげ給へり

ふくらむとはなへはめる事也さしぬきのそはと

(122ウ)

る事家々のつたへかはれり 花鳥はさしぬきの
すそとる事家々の説かはれりと云々是は
まりをけるにつきて種々の説ありと云々

此時分はさやうのさたにをよふへからすと

へす常住のさしぬきすかたなるへし浮文のさ

しぬきともをいふなるへし

花 しはれたる枝すこしをしおりて

資雅卿は懸の枝を腰にさしてけたるよ

しみえたり是は花の枝をなにとなく折たる

にや資雅卿は宇多源氏佐々木野と云蹴

鞠の家也有雅卿の子也有雅は後鳥羽院

御時の鞠足也

弄 鞠の譜等成通卿以後ありき又宇多源氏

資雅は有雅子也後鳥羽院の御代に彼資

雅折花差腰蹴鞠事有之一禅閣

鞠にあたりてしはれたる成へし

花 みだりかはしくちるめりや桜はよぎてとこそ

なと

河 吹風も心しあらは此春は桜をよきてちらさざらん

落花狼藉風狂後 麻

宮の御まへ 女三宮也

れいのことにおさまらぬけはひ 女三宮の御方

はいつもしつかならぬさまをいへり

春のたむけのぬさふくろにやとなん

(123ウ)

(124オ)

(124ウ)

河^{カハ} 手向^{テムカウ} 齋礼^{サイレイ} 手祭^{テマツ} 享礼^{キョウレイ}

ぬさふくろはすぎ袋也 拾遺^{シツイ}云物へまかり
ける人のもとにぬさをむすひふくろに入てつ
かはすとて

能^ノあさからぬ契むすへる心をはたむけの神そしるへかりける
後撰云あひかたらひける人のあからさまにこしへ

まかりけるにぬさ袋なとつかはすとて
よみ人不知

我をのみ思ひつるかのこしならはかへる山にはまとはさらまし
春のたむけとはやよひのすあなれは春のく

れて行手向といふ心也ぬさを旅の手向

にすれは春のくるゝを旅にゆくにたとたる也

花
ぬさは色々の紙をきりてすぎたるふくろ
に入たるにやさて衣のつまのすぎかけに

たとへたる也

弄
旅にたつ人にぬさをつかはすは道祖神^{ミチノソコジン}に手

向て無為にゆくへきと祝する心也折節三月
なれは春の手向と書リ 三月のすあなれは春

の暮て行たむけを云也道祖神にたむく

るぬさに衣のつまともをまかへたる也拾遺^{シツイ}
集のことばかきにも物へまかりける人のもと

ぬさをむすひふくろにいてつかはすと
てとあり 心をいはゝ女三宮の御かたの人々

みすのひまよりこぼれ出たるさまは花をす
きふくろに入たるにたるとの心也又ぬさ

(125ウ)

を袋に入てたひ人にやる事あり何篇すぎ
たる心也

ひこしろふ程に ひきつる心也

からねこ 野王案云猫似^{ネコニシ}虎而小 能^ノ捕^ツ鼠^{ネズミ} 為^ス糧^{カシ}

うちきすかたにて 女三宮也

はしより西の二のまのひんかしのそはなれは
階より西にみやれは二間にあたれるひかし

花
のはしらのはといふ心也
弄

問云まへの詞に寢殿^{シメダマ}の東面にてとみえたりこゝ

に東のそばといへるいかゝ一勘 階^{ベシ}の間も東のかゝ

りのかたにあるへき欽東のそばとは簾中の

東の柱のそばといふ心にやいさゝか心得かたき

さま也猶思案あるへし一段末案^{イタダシム}得^ユ之重可^{ツカサヘシ}
レ述所存 仍除^{ニク}之也

階^{ベシ}の間の二間め也 柏木のやすむ階より

二間はかりへたゝりてみゆるやう也

すぎゝ つぎゝにかさなるをいへりしたい

さうしのつまのやうに 衣^花のかさなりたるは

さうしのはしのやうなる也

御そのすそかちに 女三宮御たけちいさき

心にや

見かへり給へる 女三宮の御すかたをいへり

我心ちにも 夕きり也いまちとはみまいら

(126オ)

(126ウ)

せたくおもへと也

ましてさはかり心しめたる 衛門督はむねふ

たかると也

さらぬかほにもてなしたれと 夕きりの心也

柏木はみぬかほをし給へとも慥に見給けるよ

と女三宮の御ためいとをしく思ふと也

たいの南おもてにいり給へは

東對の南のひさしのかた也むらさきのうへすみ

給ふかた也 紫上の御かた也

わらうた

花 圓座也

つはいもちる

河イナチ 棒餅

鞠場にてもちいる

物也

そほれとりくふ されくふさま也

から物はかりして くだ物はかりといふ心也

大将は心しりに 夕きりは柏木のやゝもすれ

は花のかたを詠やるはみすのうちのゆかしさに

こそとよくその心をしり給ふと也

いてやこなたの御ありさま 南おもてなれば

紫上の御かた也夕きりの心世のおほえのほと

よりは女三宮のかやうにはしかなればこそと

見おとす也 紫上のかたは左様にかるくし

くなきとの夕きりの心也

なをうちとのようぬ 外も内々もおさなか

ましきはいとをしきやうなれと心えなきも

(127オ)

のそと也されは夕きりの女三宮のかたを

思ひおとすと也

河 内外の用意也

よろつのつみ 我とかになるつきことをも分別

せず思ひのほかなるひまより女三宮を見奉

てたゝならぬ心と也

物のすちは 弄 柏木をほめ給也 鞠などの

はかなき事まではくはしくをしへ給事ある

ましきを天然のきとくなるすちにてあり

けるよと也云々まりなとはとの事にはつたへ

あるましけれども物のすちとて柏木の父

にととらず上手にてめもをよひかたき

はかくしきかたには 柏木のほゝゑみでの詞

也然るへきかたには家の風もぬるくてたとひ

此鞠にて後の世まで吹つたへたりともさし

たる事あらしと也ぬるくとはたきらぬ心成

へし

河 家の風さしも吹つたへ侍らんに

久かたの月の桂もおるはかり家の風をもふかせてしかな

いかてかなに事も 源の詞也かやうの事はつたへ

などのにせてもよかるへきと也

かゝる人にならひて 源にならひては心うつし

給はしと柏木のみるめ也云々柏の心也源の御

かたちのにはやかにきどくなるに又女三宮も

(127ウ)

(128ウ)

(129オ)

ならひ給御かたちなれはいかてか我らには心をうつし給はんと也

いとよなく 柏木我身のほとをしるにも女

三宮の御あたりへはまたはるかなる身のほとなれはむねふたかりて退出し給と也まかて給ぬとある本あり又まかりて給ぬともあり心は同じ

なを此比の 柏木の詞

宮の御事の 女三宮の事也柏木の心也

院にはなをこのたいにのみ 源は紫上の御かた

のみ心よせ給と也

中の御おほえのことなる あまたおはします

中にとりわきたる御おほえなりと柏木

の給也

たい／＼しき事
弄

いかてさい有へきといふ心也 夕きり返

答也紫上はおさなくよりそたて給ふにより

て心やすきかたにこそあれいかてか女三宮

にかへてをろかにおはさん源氏やんことな

く思ひ給ふと也

こなたはさまかはり 紫上はおさなくより養

給ふそのしたしみのある成へし

いてあなかも 柏木の詞もないひかくし給

そくはしく聞たると也

(129ウ)

さるはよにをしへたゝぬ人の御おほえを
女三宮はをしなへての人の御覧にてはなき
ものをと柏木のいとをしかる也

○いかなれは花に木つたふ鶯の桜をわきてねくらとはせぬ
鶯は花にねぬ物なるを源の女三宮の方に

とまり給はぬをいふ也 心は源を鶯にたとへ

又御かた／＼を花にたとへたり花の中にも

桜を第一とするに何とて源は女三宮の桜

に夜かれをし給ふといふ心也惣別鶯は桜

花にはねぬ物といふ本説を下にもちてよ

さくらひとつに
弄

鶯は桜木にとまらずと云々女三宮に源

の夜かれ給ふ心を下にもちて柏木のかやう

にくちすさふ也

いてあなあちきなの 夕霧の心推量に

たかはす心をかけたるとみゆる也

○深山木にねくらさたむるはこ鳥もいかてか花の色にあく

夕霧返心は紫上はまへよりおはしますみ山木

にたとへ源をはこ鳥にたとふ女三宮を花

にたとへたりいかに深山木にねくらをはさた

むるともなにかは花の色にはあくへきと

宮の御うへをよきさまによめり

河ヘコトリ 梟カホトリ 箱鳥イセヤウ 或は良鳥の異名云々良

鳥は梟の一名也

(130オ)

(131オ)

(131ウ)

(130ウ)

万 深山木によるはきてなく箱鳥のあけはかへらんことをこそ
 万 あさいてにきなく箱鳥なれたにも君にこふれは時をすへ
 雄略天皇御時美作国つるき山といふ所に
 相見乙人といふ人の婦女子ををひて山中
 を行とて鶯にとられてはやく／＼とよ
 ひしに死たるゆへにはこ鳥とはいふ也はこと
 ははやこといふ心也

思へ
 なく

(132オ)

花 貞鳥のまなくしはなく春の野の草のねしけき恋もする
 八雲抄かほとり定家卿も不知之たどうつ
 くしき鳥也といへり常陸国に杜若をかほ
 花といふ此花のさく時なくといふ今案太山
 木にぬるといへは先は箱鳥正説也みやま木
 に紫上にたとふ花の色は女三宮をいふ也
 はこ鳥の事花鳥にみえたり深山にすみ
 なから花をもわすれしと也女三宮にへたて
 は有ましきと也

かな

(132ウ)

わりなき事ひたをもむきにやはといらへて
 夕きりの詞とか紫上ひとりには着
 し給はんと也女三宮のかたてうちをさ
 れ給と柏木の、給へさやうにやはと夕き
 りのいらへ給ふ也
 ひたおもむき さくらひとつに何しにと也
 ゆふぎりのむつかしく思ひていひまきらはし
 給ふ也

かんの君は 柏木は内府の御方にまた北方

もなくひとりすみにてゐ給ふと也

思ふ心ありて 柏木の心に我妻にも宮達な

らてはさたむましきと也ひとりあれはつれ

／＼なることもあれといかてかはいをとけさ

らんと太政大臣の息なれば心おこりして

たのむ心也

この夕よりくしいたく 頭痛也又苦痛也

女三宮をみ給ひしゆふへより柏木に思ひ

のつくよし也

ともかくもかきまきたるきはの人こそ

かる／＼しき人は物忌又は方違などといひて

うつろふ時もあれはをのつから隙をもうかゝふ

に是はやるかたなくふかきまとのうちにおは

しませはいかなる便にかわか心のかやうなるとは

しらせ奉るへきと也

ふかき窓のうちに
 河シテラシシイニトイダシス
 養在ニ深窓人末識 おくふかきをいへり詞

をかりたるはかり也

小侍従 かりは小侍従かもとへといふ心也

花鳥説いかゝかりは妹かりと同心也

風にさそはれてみかきかはらをわけいりて待し

文言也みかきか原とは六条院の垣のうちの

事をいへり名所にはあらず御垣の松など

(133オ)

(133ウ)

(134オ)

もよめり又禁中にて人をみそめてよめる
立かへり又やわけまし面影をみかきか原の忘れかたさに

いと、いかに見おとし給ひけん 女三宮にその

夕みえ奉るへければさそ御らんしおとしつ

らんと卑下し給ふ也

あやなくけふもなかくらし侍なと 引哥

ほのかにみたる心よくかなへり

河へみすもあらずみもせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかくめ(134ウ)

○よそにみておらぬなけきはしけれとも名残恋しき花の夕陰くろさん

柏木也心は女三宮の花をよそにのみみれば

柏木のなけきはしけれともほのみし女三宮の

夕かけか恋しきと也女三宮の花をわか物に

してえおらぬとの心也

一日の心もしらねは 柏木ほのかに見たて

まつりしことをは小侍従はしらさる也

心くるしけなる 小侍従我心ながら行末は

柏木の心くるしけなるをみ給あまる事や

あらんともあるましきこと、は思ふよし也

小侍従が女三宮に申詞也柏木のあまりに

心くるしさうなれば此返事むようとはおもへ

ともあまりにしゐての給は、御返事あ

れと申事もあらんみつからか心なから行すゑ

はしりかたきとの心也

みもせぬといひたる所を 引哥にみすも

(135才)

あらずみもせぬ人の恋しくはの心に文言ゴ
をかきたるにてさてはわれをかしは木は

みたるよといつそやのみすのつまをおほし

あはせ給て御かほのあかみたると也

あやなくけふやといひしすゑ也

心のうちそ 草子地也

つねよりも御さしらへなければ 女三宮源

をは、かり給ゆへにいつよりもさしいらへ

もし給はねはしてゐてはえ小侍従か申さぬと也

れいのかく れいとは小侍従たひ／＼返事

したる詞也つねよりもとある詞に宮も

前は御返事し給ふとみえたり

つねなししかほをなん

弄 柏木おもひをしのひ給しといふ 小侍従

文言也鞠の時柏木の難面ワザかほをつくり

給へと下の心は推量したると小侍従かかく

心也ゆたなくつれなきかほををし給よと也

河義孝集 へわひぬれはつれなししかほをつくれとも袂にかゝる雨のわひしさ

鞠の時は柏木のつれなくしらぬかほにつくり

給ひしかと下の心さもあらしとゆるす心な

かりしと也

みすもあらぬやいかに

花シ侍従はみすのつまより見給し事をしらて

返事したる也 前に柏木の見給ふことをは

(136ウ)

(136才)

(135ウ)

前半(年報6号)部分の正誤表

丁・行数		誤	正
29	オ・1	に浅香のかけはん	等。浅香のかけはん
42	オ・9	引哥なけきこる山とし	引哥なけきこる山とし。。
45	ウ・9	御身まての事は	我身まての事は
66	ウ・5	蘂合香次皇章	蘂合香次皇。響。
73	オ・9	玄上	玄上
74	ウ・10	あるによりて	なるによりて
87	ウ・5	夢に見給ふと	夢にみ。給ふと
88	ウ・4	善恵仙人之事	善恵仙人之事
91	ウ・9	佛井の願力	佛井の願力
92	オ・8	ねかひはへる處に	ねが。ひはへる處に
92	ウ・5	身を施し給ふ心歟	身を施し給ふ心歟

しらねばいかなる事をいふと也

あなかけ／＼しとかゝりかましきとはし

りがきにかく也早筆のさま也

今さらに色にないてそ山さくらをよはぬ枝に心かけきと

小侍従返 心は女三宮を枝にたとえ柏木を

さくらにたとへたりをよひなき枝に心をか

け給ふ事を色にな出給ひそしのひてこの

まゝにやみ給へといさめたる哥の心なるへし

私をよはぬえたなれはおらはやと思ふ心を

色にないてそと也おらぬなけきはし

河うづほ けれともいふ哥をうけたる也

白雲とみゆる桜もある物をよはぬ枝と思はさら

かひなき事とあり 是も柏木のいかに

なけき給ふともそのかひあるましき事

かと也

(137オ)

(137ウ)

〈解説〉

右に翻刻した黒川文庫本「孟信抄」若菜上巻の概要については、本誌六号所載調査報告十五―二に記した通りであるが、其の後の調査により得た知見にもとづき、左に補っておくこととする。

すなわち、その一は、書陵部蔵中臣祐範筆「孟津抄」との関係である。右報告において述べたように、その前半部七三丁才四行目までは、この両本は本文上は殆ど相等しい。但し、その最も大きな差異は、黒川本は項目立てが原則として明示されており、それと注文との間には、原則として改行が施されていることで、これは、祐範筆本のみならず、九条家旧蔵の伝自筆本にも見られぬところであり、むしろ内閣文庫本「孟津」など、江戸期の整序された写本類に見られる特色である。この限りに於て、該本は、その書写年代から推して、祐範本と同一書き本を持つかという、さきの報告における仮説は一部保留しておきたい。なお、これにかかわって、本巻にはさまで見られぬとはいふものの、総体として黒川本では、漢字に傍訓を加えてある巻が極めて多いが、祐範本にはこの特色は見られぬことを付記しておく。

第二の問題は、細流抄との関係である。桃園文庫本桐壺巻頭の自筆序文および内閣文庫本など流布本夢浮橋巻々尾の陶化翁の漢文跋などによれば、公条の講釈を聴聞して成ったとされるにもかかわらず、現行細流抄（および明星抄）の引用とおぼしい注文は、伝自筆本、祐範本、而して流布本のいづれたるを問わず、すべて見ることはない。もっとも東海大学図書館および天理大学図書館に蔵される九条家旧蔵伝自筆本（本行部はほぼ祐範の手跡と考えられる）には、細流抄（時に河海抄を含む）を抄出した挿入紙を持つ巻があるが、これは逆にいえば、本行部分には、細流抄が用いられなかったことを意味しよう。そして現行孟津抄は、古本・流布本のいづれたるを問わず、この挿入紙は本文文化していないといえる。然るに、この黒川本若菜上巻の後半、すなわち祐範本欠脱部には、まま細流抄と同文の項目が見出されるという事実があることを指摘しておきたい。この事実については、更に全冊にわたって詳細の調査を要するので、ここではこれに止

めておくが、その混在する形態からして、挿入丁を本行化したものとも考えられない。また、首書源氏、湖月抄など孟津抄を引く諸注が、通行本文を引くところからみても、この部分の本文は、いまのところ孤立している、としか言いようがない。因みに、河海、花鳥、弄花など肩注を付して引かれたばあいでも、その引きざまは、伝自筆本、祐範本のそれよりも、内閣文庫本等通行の江戸期写本群のそれに近い。

第三に、本冊に書き入れられた朱筆の○印および合点である。いずれも和歌の所在を示すものであるが、これは祐範筆本等には見られないものであり、且つ、本冊においても七四丁以前にはない。（但し墨筆の合点が「権中納言」「衛門督」について六七オにみられるが、前者については祐範筆本にも存在するものである。また一三〇ウ二行目「さ」としたものは、紺色の行箋を貼ったものであるが、これも祐範本にはない。これも本冊後半部の特色の一つと考えられる。かたぐ不審を散じえないが、いまの処明解をうるに至っていない。

なお、桃園文庫本の再調査に当り、再び原岡文子、大迫重治の両氏に御高配を賜わった。記して謝するものである。